

社会科

社会とのかかわりを実感を持って考えられる社会科授業

～子供が切実感を持って取り組み、話し合える授業の構想～

全体提案の研究主題「次代を担う子供たちへ」を受け、社会科では子供たちが社会とのかかわりを実感を持って考えられる授業を目指し研究を始めました。子供たち一人一人が真剣に社会を見つめ社会の様々な事象を切実に考えられるように『社会科スクラップブック』を導入するとともに、話し合いでは友達の発言をよく聴き、考えるスタイルを推し進めてきました。社会に対して実感を持ち、自分の考えを表出する子供たちの姿を授業でご覧ください。(社会科主任 川口 英利)



1 研究の方向

本年度の附属小学校全体提案の研究主題は「次代を担う子供たちへ」副主題は「互いに高め合い響き合う授業の構想」である。全体提案の目指す子供像を受け、社会科の研究は、子供たちが社会的事象をより身近にとらえ、より主体的に社会的事象に向き合い追究していくことで、社会とのかかわりを実感を持って考えられるようにしたいと考えた。そこで研究主題を「社会とのかかわりを実感を持って考えられる社会科授業」と設定した。「実感」という言葉には、授業において子供が社会を考える態度を今まで以上に真摯で真剣味を持ったものにしたいという教師の願いが込められている。表面的な言葉や主張に終始して形骸化した表現に陥らない社会科、活動の姿や表現は地味でも、子供一人一人が根の部分で質的に高い考えを持ち続けていると言えるような社会科を目指したい。ここで「実感を持って社会を考えている子供の姿」を次のように考え、目指す子供像を設定した。

ア 自分で調べたことと友達の見解を関連付け、自分と社会を結び付けて考えられる子供
イ 進んで問題意識を持ち続け、自分が社会とかわれる方法で表現する子供

研究1年次の本年度は副主題を「子供が切実感を持って取り組み、話し合える授業の構想」とし、「切実感」というキーワードを掲げた。社会とのかかわりを今まで以上に自分の身に差し迫ったものとしてとらえられるようにしたいと考えたのである。特に、子供たちが生活から取り上げた身近な課題、切実感を持った内容を大切にしていく点を重視したい。また、話し合いの場の設定として互いの違った考えを焦点化していく点を重視し、話し合いでは子供が単に「聞き合う」のではなく、心を傾けて「聴き合える」ことを目指して学び合える学習活動を展開したい。そして、振り返りや終末段階での工夫として、改めて授業として実社会とかわることの本質を検討したいと考えている。これらのことを踏まえた上で、研究内容を次の2つの柱として位置付けた。

- (1) 子供が社会的事象に対して切実感を持って考えることができる学習活動の工夫
- (2) 切実感の持てる話し合いの工夫

(1)では、子供たちの考えを生かし、切実感を持つことができるようになる学習活動について導入・追究・終末のそれぞれの段階での工夫を述べる。(2)では、学習活動の1つである「話し合い」を特に授業改善の焦点として昨年度までの研究を生かし充実させ、いっそう社会科らしい学び合いができるようになるための方策について述べる。

2 研究の内容

- (1) 子供が社会的事象に対して切実感を持って考えることができる学習活動の工夫

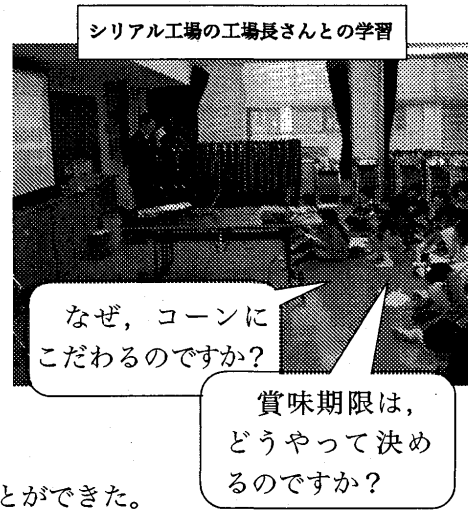
子供たち一人一人が切実感を持って社会的事象に対して考えることができるようになるために、子

や「なぜAなのか？なぜBではないのか？」や「Cの時はどうか、Dの場合はどうか？」といった多面的な見方を促す具体的な発問をするのである。

このように、子供たちの言葉を今まで以上によく聞き入れ、いっそう子供たちとのかかわりを深め、単元や学習活動の設定や発問を工夫していくことで、単元を通して問いを持ち続けて社会的事象を考えられるようになる。これらの活動を様々な単元で繰り返していくことで、子供たちは多面的な見方を持ち主体的に問いを持ち続けていくことができる。

【3年生「シリアル工場ではたらく人たちの仕事」での展開例】

導入で実際にシリアルを食べてみて「シリアルはどうやって作るんだろう」という学習問題を設定した。その解決のために、まずは商品のパッケージや『社会科スクラップブック』で調べていった。しかし、「シリアル1つ1つの形が違っているのはなぜ」といった実際に見に行かないと解決されない問いを、工場見学をして追究していった。見学によって多くのことは明らかになってきたが、「作っている人はどんな苦勞をしているんだろう」「働いている人は機械の操作以外にどんな仕事をしているんだろう」など、見学でも分からなかった点や新たに疑問に思った点が出てきた。このような問いを解決するために、工場長さんに直接聞く活動を取り入れた。これらの学習活動により、子供たちは問いを持ち続け、社会的事象をより深く追究することができた。



ウ 社会とのかかわり方を考える ～オープンエンドのあり方～

切実な問題として学習が進めば、単元の終末では社会へとかかわりを持つことが子供たちの思いとして出てくる。現実味を帯びる内容になると、自分たちがかかわれる社会の対象を真剣に考えるようになる。そして、様々な方法で表現したことを伝達することになるだろう。単元の始まりにおいては、オープンエンドを念頭に置いた授業後半までの見通しを持った学習計画を伝える場合が考えられる。また、単元によっては2段階の学習問題設定の単元構成で、後半の学習問題としてオープンエンドの活動を設定する場合も考えられる。追究段階や学習後での実社会からの応答やかかわり方を長期的なスパンで見通し、新たな問いが生まれたその後も子供たち自身の社会へのかかわりが続いていくようにする。そして、従来の『社会と生活かかわりブック』の記述に、その後の経過や体験、さらなる追究結果を記入できるようにページ構成を工夫する。これにより、授業が終わっても子供たちは本当の意味で切実感を持って学び続けることができるようになる。ここではあくまでも子供たち自身の現実的なかかわりを目指しているので、「社会で直接行動する」とか「実際にかかわらなければならない」という定義は用いないこととする。これらの行動化ができれば望ましいことだが、本校社会科としては小学校で必ずしも「行動」が社会にかかわる姿であるとは限定しない。自分たちが調べ考えた事象と自分の生活とを比較し、自分の生活を振り返り意思表示をしたり、学んだ事象について考えを深め判断したりという姿を十分に見取り、子供が社会にかかわる姿として認めていくようにする。

(2) 切実感を持てる話し合いの工夫

子供たち一人一人が『社会科スクラップブック』を活用したり、社会的事象に問いを持ち続けたりしていきながら、さらに切実感を持って考えることができるようになるためには、自分たちが調べたことをもとにしつつ、食欲に友達からも学び取ろうとするつながりのある話し合いをしなくてはならない。そこで切実感の持てる話し合いの実現のための具体的な方策を以下のように設定した。

ア 聴くことを重視した話し合い

子供たちは話し合いで出る意見と自分の考えとの共通点や相違点を重視することで、友達の発表

をポイントを絞って聴くようになる。発言者にはその意見のポイントを絞って発言するように促し、聴いている子供たちは発言者のポイントを共通点や相違点に絞ってメモするようにする。また、生活に密着した子供の考えが出てきた時、子供は話し合いに対して意欲的になる。そこで、『社会科スクラップブック』で集めた資料やその時点での調べ学習の内容と友達の見解を比較したり、関連させたりして考えるように促す。話し合いの授業でこのことを繰り返していくことで、子供たちの聴く態度が養われるとともに、授業への主体的なかかわりが持てるようになる。子供たちは友達の見解に対して共感的か批判的か、より明確に考えを持てるようになり、子供たちは友達とともに考えをつないでいく話し合いができるのである。授業で出された友達の見解によく耳を傾け、自分の考えと比較、関連させながら話し合いをしていくことで、自分の取材内容と調べ学習で得た知識が活かされ、そして友達の見解が自分と深く結び付く。これらの過程を経ることによって話し合いは充実し、そこから子供たちは社会的現象に対していっそう切実感を持てるようになる。

イ 観点や考えの違いを生かすために概念を明確にする話し合いを大切にする

話し合いでは、子供たちが追究したことをもとに具体的な事例についての発表が多く出される。話し合いが進むにつれて、その内容は概念化されていくのが一般的である。しかし、社会科では概念化したものの本質をつかむために調べて、話し合っているのに、授業ではつい具体的なことばかりを聞き出そうとしてしまうことがある。そうではなく、授業の途中に登場してくる概念を大切に、それら概念を表す言葉の意味を子供たちに問うことで、一人一人の見る観点の違いを生かした本質に迫る話し合いができるのではないかと考えたのである。

例えば、5年生の農業の学習において、学習問題設定の場面で話し合いのテーマが「日本一の稲作を目指そう！」となった場合「日本一とはどういうこと？」と率直に子供たちに問う。「日本一」には、作付け面積や生産量や生産額など様々な要素があり、これらが追究していく観点となる。そして、その見る観点の違いをもとにして追究後の話し合いでは多様な方向性から学び合えることになる。3年生の「むかしの暮らし調べ」では調べ学習に入る前に、「ここで言う『むかし』って、いつのこと？」と子供たちに問う。「むかし」の定義のために様々な意見を出させることで、調べる時間軸の設定を共通理解してから調べ学習を進めることができる。また、追究後の学び合いの場面でも5年生の「雪の多い地域と暖かい地域の暮らしの違い」について話し合う場合、子供たちから「暮らしやすい」とか「快適」という概念を表す言葉が出る。「『暮らしやすい』、『快適な生活』とは何か？どんな生活なのか？」と問うことで、子供たちが様々な視点から調べた結果と子供たち自身の「快適」についての多様な考えが表出されるのである。そして、現地に暮らす人々の考える快適な暮らし方の本来の意味を知ることによって、自分の考えと比較し理解を深めることになる。子供たちはこのような話し合いをする過程で、自分の考えを友達の見解や調べて得た事実と比較したり類型化したりして概念を明確にしていこうとするのである。

このようにして観点や考えの違いを生かすために、教師は授業で何気なく通り過ぎてしまいそうな概念を表す言葉に注目し、子供の発言をうまく汲み取っていくのである。これによって話し合いの質は高まり、子供自身の社会的現象への思考は深まり、切実感を持てる話し合いができることになる。

3 研究の成果と課題

『社会科スクラップブック』の導入によって、子供たちに生活全般から取材する力がついてきた。社会科の授業中に限らず普段の生活から社会を見る目や追究する姿勢が養われてきたため、実際の授業での発言内容が自分とのかかわりを重視した質的な高まりが認められるようになってきた。友達の見解をもとにして考えたり発言したりすることにも次第に慣れてきたことから、授業に対する姿勢が以前にも増して前向きになってきた。話し合いのあり方には次第に改善の方向性が見えてきたが、今後も話し合う場の設定や様々な話し合いのスタイルについて再考したり新たな方法を研究したりしていきたい。